
物語の終わりを見るために

むっちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物語の終わりを見るために

【Nコード】

N8620S

【作者名】

むっちゃん

【あらすじ】

一人の人間が死の前に望んだ、”物語の終わり”を神様？に新たな命を貰い一歩間違うとすぐ死ぬ世界で、目指しがんばるお話です。
注意）原作改変あり 処女作です。

第00話 終わりは始まり（前書き）

更新不定期です。

だらだらしながら、頑張るのでヨロシクデス。

第00話 終わりは始まり

プロローグ

物語とは、なんだろうか？

そんなくだらないことを、俺は病院のベッドの上で考えていた。

理由は、完結していない本を読み終えたこと、それに……自分がもうすぐ死んでしまうからだ
だと自分勝手に、意味もなく考察してみた。

そんなことを考えた自分を省みて笑いそうになる、だがこんな病院のベッドの上で孤独に死を待つ自分の状況や状態、環境を再び省みて自分が笑おうと笑うまいとどちらにしても”同じことだ”と気づき沈黙した。

何をすることもなく、目を閉じると自分の中に何も残っていない……元よりなかったかもしれないが、悔恨と呼ぶものかこの世に未練という感情が、残っていたのだ。

自覚してしまうともう歯止めは、効かなかった。死にたくないという思いが次々と溢れて止まらない。

落ち着いて自分が何故死にたくなかったのか、考える考える考える考える考える考える考える。

答えは出てしまえば、簡単だった自分は死が怖いのではなく物語の最後を最期を終わりを見れずに死ぬことがとても怖いのだ。

俺は、自分が知らないことが知らないまままで終わってしまうのが、悔しくて悔しくて残念で残念で怖くて怖くてたまらないのだ。

……………今更気がついても、手遅れだと知っていても。自分はもう明日も迎えられないと知っていても。

……………瞼を閉じるしかなかった。

意識が戻る、自分は死んだのだから意識なんてないと思っていたが、どうやらあるようだ目を開いたら、地獄だろうか？ 天国だろうか？ 少しワクワクしながら目を開く。

……………。

これは、どういうことだろうか？

目を開く前まであった真っ暗な視界とは対照的な真っ白な視界が広がっていたのだ。

上も下もなく天も地もないおそらく重力もないそんな空間が見渡す限り無限に存在していた。

しばらく眺めていると自分の体が見えないことに気が付き驚いて焦ったが、10秒くらいでそんなことは、どちらでも”同じこと”

だと思い至ってまたこの空間を眺めていた。

声が出せるのかが気になったし疑問もあったので口を開いてみた。

「ここはどこだ？」

返答は期待していなかったが呟いてしまう。

「へえ……：そっちの方は”同じこと”だと思えないんだね」

驚いた。とてもきれいな声がこの空間から聞こえてきたのだから。その声は、中性的であったが、おそらく女性だと確信した。同時に”同じこと”だとも思った。

「”同じこと”か、やっぱり君を選んでよかったよ」

また聞こえた。

「喋らなくていいよ、君は聞く側だからね、君は最悪の魂を持っているだからここに居るんだよ。これから君に新しい命を人生をあげるから死ぬ前に思っていた……：世界の終りを、物語の終わりを見てくるといい。ああ、これは、親切心じゃないよ僕の娯楽のためさ。だから何の遠慮もなく生きてくれればいい。僕？　僕はそうだね……：物語の書き手さ」

彼？は、きれいな声で俺に命を人生をあげると言った。

理解できないことも言っていたけれど、俺は”物語の書き手”と名乗った彼？に、この空間に感謝していた。喋るなとも言われていたが俺は言った。我慢できなかったから。

「ありがとう。……大好きだ。……：愛してる」

また声が響く。少し笑っているようだ。

「僕は、愛していないよ。……：じゃあバイバイ」

意識がこの真っ白な空間にとけるようになっていった。

第00話 終わりは始まり（後書き）

こんな駄文を読んでもくださりありがとうございます。
感想、批評あったら下さい

第01話 誕生（前書き）

駄文です

第01話 誕生

第1話

4年前の3月14日 俺は、物語の終わりを見る為にこの世界に生まれ落ちた。

名前は、西東^{さいとう}天^{たかし}だ。4歳です。

物心ついたのがつい3カ月前だ。これは早いのだろうか？

周囲の状況のせいで判断ができず、まったく分からない。

何故なら俺の周囲には、子供が遊ぶようなものは見渡す限り存在せず大人のそれもあり専

門的な職業でなければ家に無い生物学の本が、山積みになっているのだ。

他には、楽譜だろうと推測できるもの、ピアノなどがあった。

これでは、何が何だかわからない。

両親には、読めだの、やってろとか言われたけれど。

俺が途方に暮れているとドアの向こう側からドタドタと誰かが来るのが分かった。

ノックもなく（まあ……4歳児しか居ないのだからしょうがないのかもしれないが）入ってきたのは二人の14，5歳くらいの美少女

と言っているいい俺の姉たちである。

「「おーい元気か？ あたし達の愛しの弟、天は？」」

何か無駄にハモっていてイライラするが、何時もことだと我慢する。

無言でいると頭を両側から手加減してあるようだが、突然殴られた。

「っ！ 何しやがる！！」

俺が怒りを露わにすると……………

「愛しの姉を無視して何か考えてんじゃねえよ」

と片方が理不尽なことを言っていると、もう片方がそれに同意するように

「まったくだ。 森羅万象を無視しても、あたし達を無視してん
じゃねえーよ。前にも言っただろーが天！」

アホなことをのたまっている。

どうにかしてほしい。切実に俺は、もう9割方諦めているが……………
……………

俺は溜息をついて、

「ごめんなさい。許してください。なんでもします。」

諦めているのだ、諦めているんです。

そんな俺を見る姉たちの目は、愉悦に染まっていた……………。

「そうかそうか　なら理不尽なことや、アホなこととかやらせちまうぜ！　いいんだよな何でもするとか言っちゃたんだからよぉー。天クン？　さくって何させるかな？」

「迷うな。この前は、女装、紐なしバンジー、正座5時間、デイーブなキスとか、親父の大学に居る学生にいたずら……まだあったけど、覚えてないや」

俺がそれを聞いて、どちらにしても”同じこと”だと開き直って諦めているとドアの前に陣

取っていた姉たちの後ろから二人の人影が近ずいてきた。

おそらく俺や二人の姉たちの両親だろうと推測できた。そしてそれはあたっていた。

親父が口を開いた

「やけに楽しそうに騒いでいるじゃないか？　ん？　俺は、研究が上手くいってくれなくてイライラしているというのに。　お前たちには、天を連れてこいと命令していたんだがな、二人とも！」

怒鳴るんじゃないやねえ、と俺は心の中で毒を吐いた。

この親父は、プライドが高い小物だ。確かに教授という地位にいるのだから頭は良いが、自

分の子供に嫉妬しているのだ。この俺西東天に。

何故なら、俺はすでに親父の数十倍の演算能力を持っているからだ。

そして親父も半端に才能があったから気が付いてその才能の差に絶望したのだ。

その気持ちは、分からなくもないが仮に

も親ならその気持ちは押し殺せいつも思うのだ。

「「ごめんなさい」」

姉たちは、まだ子供に嫉妬していない父親を覚えているので後ろめたいのかすぐに頭を下げて謝る。

そんな姉たちを見ると恨みたくはないのに、親父を睨んでしまう。

だが、原因は自分なのに何もできない自分に一番腹が立つ。

母は、3人とも愛しているんだろうがやはり夫を不憫に思っているのか親父には、何も言わない。

ない。

そんな家族である。紹介しておく、

父親 西東賢悟

・高都大学人類生物学科教授

母親 西東真実

・音楽家

姉

西東準

・14歳

姉

西東順

・14歳

俺

西東天

・4歳

こんな感じである。

第01話 誕生（後書き）

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8620s/>

物語の終わりを見るために

2011年10月9日01時40分発行